



♫ 1章目 JKなのに……初めての紐おむつ！ P4



♫ 2章目 JCは授業中に内緒のおもらし♪ P33



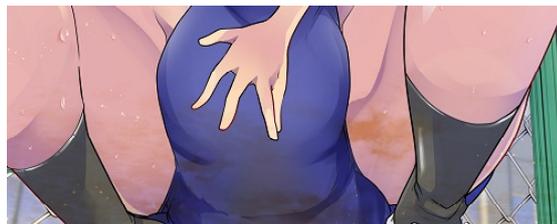
♫ 3章目 JKの赤ちゃん返り！ P65



♫ 4章目 JCのおむつはねってりぱんぱん！ P116



♫ 5章目 JKなのにブルマでうんちおもらし！ P138



♫ 6章目 姉妹揃っておむつのCMに出演するもん！ P175



♫ おむつCMの反響は……!? P191



♫ むみみ (既刊CG紹介)

## ❧ 1章目 初めての紙おむつ！

「絶対いやだ！ 誰が紙おむつなんてあてるものですか！」

顔を真っ赤にして吠えているのは、滝のように流れる黒髪の美少女。

ただしその黒髪は怒りに逆立っている。

怒っていなければ愛嬌のある黒瞳に、スッと通った鼻筋。

それにシャープな印象を与える輪郭は、すれ違った人の誰もが振り返る可愛らしさを湛えていた。

白と紺色のセーラー服に包まれている身体は、瑞々しい若さで潑刺と張っていた。

それもそのはず、この美少女の名前を、小鳥遊棗（たかなし なつめ）という。

棗を一言で言ってしまえば、現役JKの国民的美少女だ。

いままで演じてきた映画やドラマはすべて人気作となり、連日のようにバラエティ番組に出演している。

そればかりかテレビCMにも引っ張りだこで、そのジャンルも清涼飲料水や、チョコレートのお菓子など、清純派アイドルを地で行っている。

小鳥遊棗とは、日本では知らぬ者がいないほどの知名度を誇る国民的アイドルだった。

そんな棗が、顔を真っ赤にして吠えているのには理由があった。

「でもなぁ、もう棗の事務所、紙おむつのCMに出てくれるのオッケーしてくれたいし」

棗に向けて紙おむつを広げているのは、一人の少年。

棗とはクラスメートで、事務所と両親公認の恋人。

名前を漆間慎吾（うるしま しんご）という。

慎吾の父親は、日本でシェア一位を誇る紙おむつのメーカーの社長だ。

このたび新製品の紙おむつを開発したので、そのCMを慎吾の恋人である棗に依頼したのであった。

棗の事務所はこれを快諾。

さっそく棗に紙おむつをあててもらったことになったのだが……。

しかし、この段階になって棗が嫌がっているというわけだ。

「事務所がオッケーしても、私がオッケーしてないわよ！ お、お、お、おむつのCMなんて！」

ちなみにいま棗と慎吾がいる場所。

それは慎吾が住んでいる屋敷……その、慎吾の自室だ。

20畳ほどの洋間で、関係者以外は立ち入り禁止だからどんなこ

とをしても恥ずかしがることはない。

もっとも、棗と慎吾は事務所公認の恋人とはいっても清い関係だから、えっちなことはまだしたことがないのだけど。

目の前で紙おむつを広げられた棗は、顔を真っ赤にして言うのだ。

「おむつなんて恥ずかしくてあてられるわけないでしょ！」

「恥ずかしがることはないぞ。このおむつはJKのために開発した、特別な紙おむつなんだ」

慎吾は持っている紙おむつを広げて丁寧に説明していく。

「まずはショーツと変わりないくらいの極薄型。こんなに薄いけど、吸水ポリマーが縫い付けられているから、かなりおしっこを吸収してくれる安心設計だ。それにおしっこの匂いも、新開発の『香るビーズ』によって石けんのいい匂いになるんだぞ」

「それに万が一うんちをしたときも、うんちポケットがあるから外に漏れ出してくることもない優れたものだ」

「そして見てくれ。この可愛いデザインを。JKが少しでも紙おむつをあてることに抵抗がないように、ピンクのウサギ模様になってるんだ」

おむつを広げながら丁寧に説明する慎吾。

だけど棗は顔を真っ赤にして、それはそれは嫌そうな顔で言うのだ。

「だけど……この年になって紙おむつなんて……」

「ほら、なにかイベントとかあると女子トイレっていつも混んでるだろ？ この紙おむつは、そういう煩わしいことから女性を解放するという意味もあるんだ。このCMには、棗こそ適任だと、俺は思う！」

「むむっ〜」

丁寧に説明を重ねても、棗はなかなかオッケーサインを出してくれない。

まあ、難航することは予想できていたことだが。

こんなこともあるかと、助け船を用意しておいたのだ。

「お姉ちゃん、プロならどんな仕事もこなさないっ」

慎吾の援護射撃をしてくれたのは、一人の少女。

JCの制服であるピンクのブレザーと、水色のミニスカートを着ている。

そのさらさらのロングヘアは棗とは違って、髪は派手な金色に染めて、ツインテールに結い上げている。

見るからに今風のギャル！ という感じの少女だ。

少女の名前を、小鳥遊芽衣（たかなし めい）という。

棗の妹で、人気ユーチューバーの歌い手として活動している。

チャンネル登録数は日本国内でも上位に入るほど。

芽衣の歌声を知らぬ若者はいないくらいのユーチューバーだ。

そんな芽衣は、小悪魔のようなイタズラっぽい笑みを浮かべながら言うのだった。

「それにほら、お姉ちゃん。この紙おむつ、とっても可愛いよ？ お兄ちゃんも、カノジョがおむつあてたところ、見たいよね！」  
「ああ。俺は棗のおむつ姿、みたいぞ。絶対に可愛いと思うんだけどなぁ」  
「うう〜っ」

芽衣の援護射撃もあり、棗は恥ずかしそうな顔を浮かべながらも、太ももを擦り合わせている。  
あともう一押しだ。

「棗のおむつ姿、絶対に似合うと思う。それにこのおむつのデザインは俺が考案したんだ。棗のため、棗に最初に穿いてほしいって思って」  
「うう……。私のために……。そ、そこまで言うなら……」

棗は顔を真っ赤にしながら呟く。

「わかったわよ……。あててもいい……。紙おむつ」  
「よし！ それなら決まりだ。俺があててやるから、そこのベッドに横になってくれ！」  
「はぁ!? な、なんであなたにあててもらわないといけないのよっ。いい、自分であてる！」  
棗は再び顔を真っ赤にして吠える。

まあ、予想していたことだけど。

「ショータイプ紙のおむつならそれで問題ないんだけどなー。今回のおむつはテープタイプなんだ。だから間違ったあて方をすると横漏れしてきちゃったりするからな、俺が正しくあててやる」

「うう……。でも、そんなことしたら……。おまた、見られちゃうし……。事務所には清い交際だからオッケーしてもらってるのに」

「大丈夫。おむつをあてるときに邪念なんてないぞ。それにこれは将来赤ちゃんができたときのための練習でもあるんだ」

「将来……。赤ちゃん……。うう～」

顔を真っ赤にして嫌がっている棗。

ここで更なる助け船を出してくれたのが妹である芽衣だった。

「お姉ちゃんが嫌なら、あたしがお兄ちゃんにあててもらおうかな、紙おむつ♪」

「なっ!？」

「むう！」

唐突な爆弾発言に、棗と慎吾は同時に驚いてしまう。

清純派アイドルの妹であることが信じられないくらい小悪魔なところがあるのが芽衣という女の子だった。

「芽衣っ、なんてこというのっ。紙おむつをあててもらうのはわたしよ！」

「えーっ、だってお姉ちゃん、嫌がってるし」

「嫌がってなんかないっ。本当は私だってあてて欲しいに決まっているじゃないのっ」

「ふふっ、そうなんだ」

「はっ!？」

このときになって棗は自らの失策に気づいたらしい。

さすが芽衣。

姉の操縦の方法をよく心得ている。

「い、いやぁ、棗の本音が聞けて、俺はとても嬉しいぞ」

「むむう〜……。言っちゃったものは仕方ないし……。わかった、その代わりに、一つだけ条件があるの。いいかしら？」

「おう。なんでもいいぞ」

「うん……。こ、このおむつをあてたら……。キス、してほしい」

「お、おう」

顔を真っ赤にさせて、国民的アイドルがキスをお願いしてきている。

そのシチュエーションに思わずクラッとくるけど、ここで倒れるわけにもいかな。

「わかった。約束しよう。だが、仮にもファーストキスになるから、シチュエーションにはこだわりたいよな」

「うん。……。キスするっていう約束が欲しいから……。いつキスをするのかは改めて考えたい……。こんな状況じゃまともに考えられないし……」

「よし、それじゃあ決まりだな。いまから棗におむつをあててあげよう！」

「あっ！ ちょっと待って！」

いざあててやるぞ！

と言うときになって、再び制止したのは棗の声。

「なんだ、まだなにか条件があるのか？」

「い、いえ……そういうわけじゃないんだけど、その……今日は体育があったから、せめてシャワーを浴びてきたいんだけど」

「なんだ、そんなことか。大丈夫、棗の匂いなら気にしないから」

「そうそう。お姉ちゃん、早いうちにすべてを曝け出しちゃったほうがいいって」

「ダメッ！ 恥ずかしい！ 幻滅される！」

「まさか国民的アイドルからそんなセリフが聞けるとは思ってもいなかったぞ」

「恥ずかしいものは恥ずかしいのっ」

「まあまあ、気にするなって」

「ああっ」

嫌がる棗の身体を抱えると、ベッドへと押し倒す。

そのベッドはいつも慎吾が寝ているベッドだ。

「うっ、まさかこのベッド、あなたが使ってるの!？」

「ここは俺の部屋なんだ。俺のベッドに決まってるだろ」

「うあぁ……。どうしよう、初めてベッドに押し倒されちゃって

る……っ。それに、あなたの匂いに包まれてる……！」

「いやか？」

「ううん。嫌じゃない」

「そっか。それじゃあおむつをあててやるから大人しくしてるんだぞ」

「うう～」

なんとかベッドに仰向けに寝かしつけたものの、本番はここからだ。

慎吾は邪念と劣情を振り払うと、

「よしっ、まずは赤ちゃんがおむつをあてられるときみたいに脚を開いてくれ」

「ううう～っ」

棗は顔を真っ赤にさせながらも、脚を開いてくれる。

紺色のスカートが捲れ上がり、露わになったのは――、

もわわ……っ。

漂ってきたのは、汗の香り。

そしてツーンとしたアンモニア臭。

脳に染みこんでいきそうなその香りには、女の子のフェロモンが含まれているのだろう。

男を痺れさせる香りがした。

「あんまり……みないで」

むわわ……。

捲れ上がったスカートから露わになったのは、国民的アイドルにしては庶民的なしましまショーツだった。

白と、水色をしている。

「か、可愛いぱんつを穿いているんだな」

「可愛いとか言わないのっ。恥ずかしいんだからっ」

キュンッ。

本当に恥ずかしいのだろう。

棗のしましまショーツは、スッと縦筋に食い込んでいて、ヒクヒクと痙攣していた。

(ぱんつ、黄ばんでる……)

とは思ったけど、口には出さない。

縦筋に食い込んでいるクロッチはかすかに……と言うよりも、かなり黄ばんでいた。

体育の授業で飛んだり跳ねたりしているうちに、知らぬ間に漏れてきてしまったのだろう。

女の子の尿道は太く、短いし、それに尿道は膀胱からシュッと真下に伸びている。

それにふっくらとしたおまたの尿道括約筋は、男のものと比べる

とあまりにも貧弱で、おしっこを我慢することができない。

「それじゃあ、まずはぱんつを脱がせるからな」

「うう……。そんな恥ずかしいこと、聞かないで……」

恋人同士の関係とはいえ、まだキスもしていない。

当然、こうやってショーツを見るのも初めてだし、おまたを見るのも初めてだったりする。

けどこれは仕事のためなのだ。

しかもその仕事は、これからのJKのライフスタイルを変えるかもしれない大仕事。

「よし、脱がすぞ……。っ」

「あううっ。やっぱり恥ずかしいっ」

「お姉ちゃん。恋人同士なら、いつかは恥ずかしいところを見られるんだから、ね？ それなら早いほうがいいに決まってるって」

「うううう〜っ」

棗は緊張でガチガチに固まっていたけど、少しでもショーツを脱ぎやすいように協力してくれた。

おかげでなんとかショーツを脱がせてあげることができた。

「こ、これは……」

慎吾は、驚愕のあまりに言葉を失ってしまった。

なにしろ、棗の女の子の部分は――、

「ぱ、ぱいぱん……!?」

慎吾は思わず口走ってしまう。

よほどのことがなければ驚かず、笑わないと覚悟を決めていたけど、それでも慎吾は驚愕していた。

棗の女の子の部分は、産毛さえも生えていないパイパンだったのだ。

シュッと刻まれた縦筋に、ピンクの桜の花びらのような小陰唇がちょこんとはみ出している。

「うう……。そんなに見ないで……。幻滅される……。ううっ、絶対に幻滅される……」

棗はといえば、顔を真っ赤にして脚を開いていた。

もう抵抗する気力さえも残されていないらしい。

「幻滅なんてするものか。棗のおまた、つるつるして、ふっくらしてて、とっても可愛いと思うけど」

「か、可愛いなんて……。そんな、恥ずかしすぎるのに……っ」

ヒクンッ、ヒククンッ。

もわわ〜ん……。

棗のパイパンが痙攣すると、甘酸っぱい香りが立ち昇ってきているようだった。

汗のような、甘ったるいミルクのような、おしっこのような、色々なものが混じり合った複雑な香り。

「……って、ずっと見てたら俺も我慢できなくなりそうだからな、さっそく紙おむつあててやるからなー」

「うん……もう早くあてて……」

すっかり大人しくなった棗は、仰向けになって脚を広げている。それはまるで赤ちゃんがおむつをあてて欲しいとせがんでいるように。

「まずは紙おむつをしっかりと広げて、と。お尻の下に敷くぞ」

「う、うん……」

紙おむつをあてやすいように、棗はお尻を浮かしてくれる。

「棗のお尻の下に紙おむつを敷いて、それからおまたを包み込むようにおむつを前のほうに持ってきて……、それから横からテープで留めてっと。よし、これで完成だ！」

「あぁ……。おむつ、あてられちゃったよぉ……」

「脚の付け根に食い込んで痛かったりするか？」

「それは……大丈夫……。あったかくて……ふかふかしてる……お尻包まれて……心地いい、かも……」

「そっか。それはよかった」

ぽんぽん、

おむつに包まれた棗のおまたを軽くはたいてあげる。  
すると棗は安心しきっているかのように熱い吐息を漏らしてみせた。

だが。  
まだこれは中間点でしかない。  
棗には真に気の毒なことだが。

「さて、まずは第一関門突破、だな」  
「えっ？ な、なにを言ってるの？」

棗はキョトンとした表情で身体を起こす。  
もう今日のお仕事はやりきったと思っていたに違いなかった。

「棗には、実際の使用感を確かめて欲しいな、と思ってるんだが……いいか？」

「し、使用感って……あてただけじゃダメなの!？」

「実際に、おしっこをして欲しいんだが……」

「お、おしっ……！ そんな恥ずかしいことできるわけないじゃないの！ それにこのおむつ、ぱんつみたいに薄いのにっ」

嫌がる棗。  
だが……しかし。  
ここで退くわけにはいかない。

「その点は安心してくれ。この紙おむつは極薄だけど、超高性能の

吸水ポリマーが縫い付けられているから、しっかりおしっこをキャッチしてくれる優れものなんだぞ」

「そんな……安心してって言われても……おしっこなんて……」

「とりあえずベッドから降りてみてくれ。立っているときの使用感とかも聞きたいから」

「う、うん……」

手を取って立ち上がらせてあげる。

棗の手は小さくて柔らかくて、それに熱くて溶けそうになっていた。

「ちょっと……もこもこしてるような気もするけど、うん、ぱんつみたいでいいかも？」

ベッドから立ち上がった棗は、スカートの裾を整えると、その場でくるりと一回転。

セーラー服のスカートの裾が軽やかに舞うと、ふんわりと甘くていい匂いがした。

「なるほど、立った状態での使用感は問題なし、と。それじゃあ次は……」

「ほ、本当にしないと……だめなの？」

「棗が嫌なら無理強いはしないが……」

だけどさすがにおしっこは恥ずかしいのだろう。

棗は顔から火が出そうなくらいに真っ赤になっている。

おしっこはまた今度の機会にしたほうがいいかなあ、慎吾もそう思っていると、しかし芽衣は違うようだった。

「お姉ちゃんっ。プロなら最後までやりきるべきだと思うっ」

ここまでくると助け船というよりも、藪をつついて蛇を出すと  
言ったほうが的を射ているかもしれない。

ここから先は危険だと思うんだ、うん。

慎吾の理性も保たないかもしれないし。

「ど、どうする……？ 棗が嫌だったら、また今度にしてもいい  
が……」

「あ、あなたは……その……見たいの……？ 私がおしっこして  
るところなんて……」

「ああ、見たい」

「即答しないの。変態」

怒らせてしまったらどうか？

そう思って謝ろうとし——、しかしそれは杞憂に終わる。

「わかった。おしっこしてみる！ プロなら最後までやりきらない  
と、ね」

「さすがお姉ちゃん！」

どうやら棗のプロ根性に火がついてしまったようだ。

棗は小さく頷くと、ゆっくりとスカートを捲り上げていく。

露わになったのは、真っ白で細い太もも、そしておまたを包み込んでいるうさぎ柄の紙おむつ。

ショーツのように薄いとはいえ、やはりちょっともこもこしている。

「私のおまた……可愛いって言ってくれたし……。あなたにだけ、なんだから。こんなに恥ずかしいところ見せるの」

スカートの裾をつまみ上げている凜は、頬を赤らめながらも、身体から少しずつ力を抜いていき――、

「……ンッ」

鼻から漏れるのは、熱い息。

それでもなかなかおしっこは出てきてくれなかった。

棗はおしっこを出そうと、おまたに力を入れているのだろう。

「んんん～～～？ んっ！」

ヒクンッ、ヒクンッ。

棗の内股がかすかに痙攣している。

内股が痙攣しているということは、おむつで覆われているおまたも痙攣しているということだ。

それでもなかなかおしっこは出てきてくれないようだった。



「はぁ、はぁ……。出て、こない……」

「無理しなくてもいいからな。おむつにおしっこをするのって、意外と大変だから。モニターの人でも苦労するって言ってたし」

「うん……。なかなか出てきてくれないものね。おまたの変なところに力が入ってる感じがする」

女の子は、おしっこをするときですら個室に籠もって一人でする。

だから、ただですら人前でおしっこをするとなると緊張するのだろう。

きっと棗の尿道は緊張でガチガチに固まっているに違いなかった。

「棗、顔真っ赤だぞ。あんまり無理しないほうが……」

「やだ。一度やるって決めたことは最後までやりきるの」

「お、おう」

清純派アイドルとして全国に名を馳せている棗だけど、付き合ってみると意外と頑固なところがある。

一度やると決めたことは、それが間違っていることでも無い限りは最後までやりきる。

だからこそ、棗はアイドルとして人気を博しているのだろう。

「んっ、んんん……。あっ、出そう……。出て……。きそう……」

「そ、そうか……。がんばれ、がんばれっ」

「お姉ちゃん、あと一息っ」

「あっ、あっ、あっ、ああ……っ」

じゅわわっ。

棗は、確かに感じていた。

尿道をおしっこが少しずつ進んでいき、噴き出す感触を。

そしておむつの裏側が、じんわりと生温かくなる背徳的な感触を。

おむつを、汚してしまう――。

「あっ、ダメ……止まらない……っ」

しゅiiiiiiiiiiiiiiiiiiii……。

あんなにも出すことに苦労していたおしっこなのに、一度出てくると、今度は止められなくなってしまう。

ヒクンッ、ヒクンッ、おまたに力を入れても、生温かいおしっこが漏れ出してくる。

「はうう……、おまた……あったかい……」

しゅわわわわわわわわわわわわわわ……。

紙おむつから聞こえてくる、くぐもった水音が止まらない。

やがて白かったおむつの生地が、濃いめの黄色に染まってくる。

それは間違いなく棗のおしっこの色だった。

「うう……今日は体育の授業があったから……」

「綺麗な濃い黄色だな。体内でおしっこが凝縮されていた証だ」

「恥ずかしいこと言わないの。変態っ」

シュイイイイイイイイイイイイイイイイ……。

棗のおしっこの音は、鋭く、大きかった。

紙おむつ越しであっても、しっかりと聞こえるほどに。

赤ちゃんのようにつるんとしたおまたがおしっこに生温かく濡れていき、溶かされそうになり――。

「ひっ、ひい!？」

棗が引き攣った悲鳴を上げてしまったのは、そんなときのことだった。

なにしろ、おしっこを受け止めてくれている紙おむつが、もこもこと膨らみはじめたのだ。

股間を覆っている紙おむつは、まるで真夏の入道雲のように膨らんできている。

「ひっ、ひい!? おむつ、膨らんできてる……!？」

「ああ、それは安心してくれ。紙おむつに使われている吸水ポリマーはおしっこの水分に反応すると膨らむんだ。膨らむことによって、おしっこを閉じ込めているんだぞ」

「そ、そうなんだ……。でも、変な感じがするう……」



「ああぁ……。我慢してたから、いっぱい出てる……」

「アイドルは大変だよな。学校でもあんまりトイレに行けないし」

「うん……」

しゅわわわわわわわわわわわわわわわわ……。

ぷるるっ！

ぷっしゅうううう！

棗は小さく身震いをして、最後の一飛沫を噴き出してみせる。  
長かった棗のおむつへの放尿は、唐突に終わった。

「全部……出ちゃった……」

「スッキリしたか？」

「うん……。スッキリした、けど……」

「おむつは気持ち悪くないか？ 遠慮無く聞かせてくれ」

「それは……。大丈夫、だと思う。サラッとしてて、濡れてる感じもしないし。風通しもよくて……。とてもいい感じだと思う。ただ……」

「ただ？」

「ちょっと重たくなってる感じがするわね。おむつが落ちてきそう  
で怖いかも」

「なるほど。腰ゴムは改良の余地有りだな。担当者に伝えておくこ  
とにするよ」

「ふう……」

棗は熱い吐息を漏らすと、つまみ上げていたスカートの裾を整える。

「だけどよほど気を張り詰めていたのだろうか？」

「あっ」

棗は風に吹かれるススキのようによろめいていた。

「おっと、危ない」

とっさに抱きとめてあげると、棗の身体は熱くて蕩けそうになっていた。

きっとおむつのなかも熱く蒸れていることだろう。

「よし、それじゃあおむつを外してやるからな」

「……え？」

「いや、だからおむつを外してあげようかなと」

「いい！ 自分で外す！」

「いやいや、これも大切なことなんだ。外すときに簡単に外せるか調べないと」

「そんなぁ～」

珍しく情け無い声を上げてみせる棗。

「どうやらおむつをあてられるよりも、外されるほうが恥ずかしいらしい。」

「だけどここは逃がさない。」

抱きしめたまままでベッドに押し倒す。

「安心してくれ。しっかりお尻拭きも用意してあるから」

「お、お尻拭き……っ」

「それじゃあ、大人しく脚を開いて」

「うう～っ」

涙目になりながらも、棗は赤ちゃんのように脚を開いてみせる。

ショーツのように薄型だった紙おむつは、棗のおしっこを吸収してパンパンに膨らみきっていた。

「外すからなー」

「ううーっ」

棗は涙目になって脚を開いている。

もう好きにしろ、ということらしい。

こういうのは思い切りが大事なのだ。

「テープの剥がし具合はどうかな？ バリバリバリッと！」

「あああ！」

もわわ～ん……。

立ち昇ってきたのは、濃密なアンモニアの湯気。

それでも紙おむつのおかげで、石けんの柔らかい香りになっている。

棗のおしっこが染みこんだ紙おむつの裏側が露わになる。

おむつの裏側は、濃厚な黄色に染め上げられていた。

それは棗がおしっこをかなり長い時間にわたって我慢してきたという努力の証だ。

「いっぱい出せて偉いぞ。いまおまた拭き拭きしてあげるからな」

「そ、そんな……事務所に怒られちゃう……」

「これは商品開発のために重要なことなんだ。仕事だぞ、仕事」

「むむっ」

「弊社が開発したサラサラのお尻拭きだ」

「あっ、あうっ、あん！」

くにゅ、くにゅくにゅ。

赤ちゃんのようにつるつるのおまたに、指を食い込ませて拭き拭きしてあげる。

おまたの奥のほうは汚れが溜まりやすいので特に念入りに。

「うう……。こんなところ隠し撮りされてたら人生終わる……」

「そのときは駆け落ちでもするか」

「うん……」

すっかり大人しくなった棗のおまたとお尻を綺麗に拭いてあげる。

あとはショーツを穿かせてあげれば元通りの棗だ。

「ぱんつ、穿かせてあげるからなー」  
「うん」

仰向けになっている棗は、ぱんつが穿きやすいようにと脚を閉じてくれる。

そんな凜にショーツを穿かせてあげる。  
キュッと、クロッチにおまたが食い込むくらいまで。

「ンッ」  
「よし、協力サンキュ、な」  
「仕事だもの。これくらい平気なんだから」

いつものスタイルに戻った棗は、ベッドから降りるとスカートの裾を正している。

そこについさっきまでおむつをあてられて真っ赤になっていた少女の面影はなかった。

さて、これでCM撮影に一步近づいたわけだが……。

しかし、これは思っていたよりも難しいことになりそうだ。  
まずは棗に紙おむつに慣れてもらわなくてはいけない。  
そうでないと、CMで自然な笑顔を引き出すことが難しいことになる。

(これから大変なことになるな)

人知れず慎吾が溜め息をついていると、しかし目を輝かせていたのは芽衣だった。

「ねえねえお兄ちゃん！」

「ん、なんだ？」

「お姉ちゃんが気持ちよさそうだったから、あたしもおむつあててみたい！」

「いいのか？ モニターは多い方がいいからな。助かるぞ」

「任しといて！ モニターがんばるからっ」

「それじゃあ、さっそくで悪いけど、明日学校にあてて行ってくれるか？ できるだけ日常生活に即した感想が欲しいんだ」

「オッケー！ 学校におむつあてていくなんて、なんか非日常的でドキドキしてきちゃう！」

頬を赤らめて嬉しそうに言ってくれる芽衣。

こう言う声を聞くと、おむつを作っていてよかったなと思う。それだけおしっこのトラブルが多いということなのだろうか。いつも女子トイレは混んでいるし、大変なのだろう。きっと。

「わ、私も……っ」

予想外に口を開いたのは棗だった。

顔を真っ赤にさせながらも、

「私も……っ、CMのために、おむつに慣れておく必要があると思うのっ。だから……っ」

「棗もあててくれるのか？」

「あ、当たり前じゃないの。私の……仕事なんだから！」

どうやら棗のプロ根性は燃え上がっているらしい。  
喜ばしい限りだ。

こうして。

おむつのCMのために、国民的美少女とその妹におむつをあててもらおう学園生活が始まることになるのだった。

これから待ちかまえているレモン色で茶色いイベントの数々を、棗も、芽衣も、そして慎吾も知るよしもない――。

**体験版はここまでです！**  
**次のページからは既刊CGの紹介！**  
**お楽しみ下さい！**

～ 既刊紹介 ～

各種DLサイトで配信中！



